

# The Canterbury Tales に見られる 季節関連の表現と季節観

池 田 広 昭\*

Description and Image of the Seasons as Observed  
in G. Chaucer's *The Canterbury Tales*

Hiroaki IKEDA

## Abstract

The purpose of this paper is to pick out as comprehensively as possible the passages in Chaucer's *The Canterbury Tales* suggesting the seasons of the year and study the characteristics of his description of the seasons and the image of the seasons these expressions imply. *Otogi-zoshi*, a selection of 23 medieval Japanese short tales, has been referred to for comparison. The results are as follows:

Chaucer's references to the seasons of the year in *The Canterbury Tales* are, as a whole, much less frequent than those in *Otogi-zoshi*.

The way he mentions the words "spring", "summer", "autumn", and "winter" and the names of the months reveals that he might have grasped the year in terms of two seasons, namely, summer and winter, in stead of four seasons.

Most of his references to the seasons are centered on the summer season, especially the month of May. He mentions May by far most frequently of all the months and twice as often as "summer", and uses it in his simile in very positive senses; May is regarded as fresh, bright, and fair.

The use of the name of a month in simile and the straightforwardness of such expressions are quite uncommon in traditional Japanese literature including *Otogi-zoshi*, where one of the four seasons would replace it and expressions might be stylized, complex, and subdued.

In describing the seasons he displays no inclination for sadness which is prevalent in Japanese classics.

Unlike in traditional Japanese literature, the plants and animals he mentions in *The Canterbury Tales* generally lack the sense of the seasons.

## 1. 序

本稿は Chaucer の *The Canterbury Tales* の中に見られる季節に関する表現についてその特徴とそこから窺われる季節観を検討することを目的とする。適宜『御伽草子』と比較対照しながら話をすすめていくことにする。対比するものとしては *The Canterbury Tales* と同等の作品が望ましいが、Chaucer と同時代の日本、すなわち南北朝時代には適当なものが見当たらないの

で、次善の策として *The Canterbury Tales* といくつかの点で共通の性格をもつ『御伽草子』を選ぶことにした。ここで用いる『御伽草子』は、広い意味の、500 編にも数が達すると言われる中世小説群のことではなく、江戸時代中期から流布した 23 編からなる狭義の『御伽草子』である。*The Canterbury Tales* も『御伽草子』もどちらも口承的性格の強い説話集であり、収められている物語の数がほぼ同じである (*The Canterbury Tales* は未完の物語を含め 24 編である) 点で基本的に一致している。成立年代は *The Canterbury Tales* が 14 世紀後半、『御伽草子』のほうは大部分の説話が 14 世紀後半から 15 世紀にかけてのもので

あるとされる。この他、物語の内容のバラエティーの豊かさや啓蒙的性格、宗教色の濃さなどに共通点がみられる。分量、すなわち作品の長さは *The Canterbury Tales* が『御伽草子』の1.5から2倍程度とみられる。

## 2. 季節の区分

季節を表す表現が全体でどの程度使われているかということから検討を始める。そうすると季節表現の言及回数が全般に多いか少ないかということのほかに、季節の区分そのものにかかわる事柄が浮かび上がってくる。最も明白な季節の表現である spring, summer, autumn, winter という語を、語彙索引<sup>1)</sup>や *The Oxford English Dictionary*などを参照しつつ調べると、*The Canterbury Tales* 中、春という意味の名詞の spring (*The Canterbury Tales* 中では無論古い綴り字もしくは語形が使われている)の用例は0回、summerは10回、autumn 0回、winter 10回となっている。このように直接的な季節表現は *The Canterbury Tales* 中全部合わせて20回であり、*The Canterbury Tales* の分量から考えて決して多いとは言えない。月日からも季節がわかるので January から December までを人名としての用例を除いて調べてみると、March 6回、April 3回、May 20回、June または July (写本によって June のものと July のものがある)1回で、他の月には言及がない。May が summer と winter より多いのが特徴的である。

『御伽草子』のほうは、大和ことばの「春」「夏」「秋」「冬」という語を原文から直接拾いだしてみると<sup>2)</sup>、「春」44回、「夏」13回、「秋」32回、「冬」13回である。音読みの使用例は「春」4回、「夏」2回、「秋(シウ、ジュ)」3回、「冬」1回である。次に月を拾うと以下の通りである。「正月」8回、「あらたま」2回、「如月」1回、「二月」2回、「弥生」2回、「三月」3回、「五月」1回、「水無月」1回、「八月」3回、「九月」1回、「十月」3回、「十一月」3回。作品の長さを考慮に入ると『御伽草子』のほうが直接的に季節を表す表現の密度がかなり濃いと言える。主観的な言い方になるが、実際に『御伽草子』を通読すると季節を表す語句の多さが実感される。これは間接的な季節表現がいっしょに目に触れるせいもあるだろう。当然、季節関係の語句の分布上の疎密は存在するが、全体として、多いと感じる。一方、*The Canterbury Tales* のほうはそういう感じを受けない。

*The Canterbury Tales* に春秋を表す spring と autumn という語の使用例がまったくないということは見逃すことのできない事実である。

Spring という語はもともと leap, fountain という意味であったが、後に「芽が spring (=leap) する季節」という意味で使われるようになり、「春」という名詞として独立したのは16世紀のことである。春という意味で使われた名詞の spring の用例で、*OED* に載っている最も古いものは1547年のものである。*The Canterbury Tales* に春の意味の spring の用例が見られないのは当時まだこういった用法がなかったか、もしくは定着していなかったからである<sup>3)</sup>。

Autumn という語は *OED* によると、一番古い例は Chaucer によるのものである。Chaucer はイタリアの Boethius の *De consolacione philosophiae* (*Consolation of Philosophy*) の英訳の中で autumpne という訳語を4回使用している。訳本の Book 1, Metrem 5, 24-25 に in autumpne (that is to seie, in the laste ende of somer) という箇所があり、autumpne の意味が「夏の最後」であるという説明的註を付けている。つまり註がなければ意味がわからない恐れがあると考えていたということである。Autumn という語そのものが、ほかならぬ Chaucer 自身が英語に導入した語であったとなると、当然ながら当時 autumn という語はまだ認知定着していなかったことになり、*The Canterbury Tales* に用例がなくても不思議ではない。

Summer と winter という語は spring と autumn と違い、古英語の時代から夏と冬の意味で存在していた歴史の古い語である。Winter は water と同根であるという説が有力である。すなわち wet な(雨の降る)季節という解釈である。また、異説として white と同根だとする説もある。つまり白い(雪の)季節という意味である。古英語はゲルマン語に属するが、古代ゲルマン人は年数を数えるのに「冬」を用いていた<sup>4)</sup>。年を季節のうちの一つまたは二つで代表させるのはそれ自体めずらしいことではなく日本や中国でもみられることである。だが、日本や中国では春か秋または春秋で代表させるのが普通であろう。Winter で年数を数える用法は次のように *The Canterbury Tales* にもみられる。

[1] In sterres, many a wynter ther biforn,  
Was writen the deeth of Ector, Achilles,  
Of Pompei, Julius, er they were born;

- (B. ML. 197-199)<sup>5)</sup>
- [2] This constable was nothyng lord of this  
place  
Of which I speke, ther he Custance fond,  
But kepte it strongly many a wyntres space  
Under Alla, kyng of al Northhumbrelond,  
(B. ML. 575-578)
- [3] I trowe a thritty wynter he was oold—  
(B. Sh. 1216)
- [4] And fully twenty wynter, yeer by yeere,  
He hadde of Israel the governaunce.  
(B. Mk. 3249-3250)
- [5] He was, I trowe, twenty wynter oold,  
(D. WB. 600)
- [6] Thogh that I myghte a thousand wynter telle  
The peynes of thilke cursed hous of helle.  
(D. Fri. 1651-1652)
- [7] And so bifel that whan this Cambyus-  
kan  
Hath twenty wynter born his diademe,  
(F. Sq. 42-43)

10例ある winter という語の用例のうち7例までが year の意味で使われている。したがって本当の意味で冬という季節を表す用例は3例しかない(冬を表す用例は後出)。Chaucer の頃はまだ winter の古英語的用法が生命力を保っていたということがわかる。

Summer のほうは語源をたどると「半分」を意味する semi-と同じところにたどり着く。Summer というのは冬を基準として1年の半分を表す語であった。

Chaucer の時代に spring と autumn という語がまだ定着していなかったとすると、春と秋を表す語が別にあっただけであろうか。春を示す語としては四旬節を表す Lent という語が近いとされる。また、秋には収穫を表す harvest が用いられたとされる。The Canterbury Tales には Lent の用例が3例みられるが、harvest の用例はみられない。しかし、この頃イギリスではまだ一年を四季に分ける考え方は一般的ではなく、winter と summer の二季に分けていたと考えられる。これは北ヨーロッパのゲルマン諸語の季節観である。このことを裏付ける例として The Canterbury Tales 中に次の二節がある。

- [8] Oure Hooste saugh wel that the brighte  
sonne  
The ark of his artificial day hath ronne  
The ferthe part, and half an houre and  
moore,  
And though he were nat depe ystert in loore,  
He wiste it was the eightetethe day  
Of Aprill, that is messenger to May ;  
And saugh wel that the shadwe of every tree  
Was as in lengthe the same quantitee  
That was the body erect that caused it.  
And therefore by the shadwe he took his wit  
That Phebus, which that shoon so clere and  
brighte,  
Degrees was fyve and fourty clombe on  
highte,  
And for that day, as in that latitude,  
It was ten of the clokke, he gan conclude,  
And sodeynly he plighte his hors aboute.  
(B. ML. 1-15)
- [9] Whan ended was the lyf of Seinte  
Cecile,  
Er we hadde riden fully fyve mile,  
At Boghtoun under Blee us gan atake  
A man that clothed was in clothes blake,  
And undernethe he hadde a whyt surplys.  
His hakeney, that was al pomely grys,  
So swatte that it wonder was to see ;  
……  
It semed that he caried lite array.  
Al light for somer rood this worthy man,  
(G. CY. 554-560, 567-568)

[8] は Introduction to the Man of Law's Tale の冒頭であるが、この部分は The Canterbury Tales の話の上では現在を表す。したがって Chaucer の加わっている巡礼一行が今4月18日の時点にいることを示している。The Canterbury Tales が未完の作品であるためはつきりと判断できないが、この日は多分巡礼の第一日目か二日目頃に当たるとみられる。[9] も The Canterbury Tales の上では現在であり、この日の前日に一泊したという設定になっている。その前日というのが4月18日だとするならば、この日は4月19日ということになる。いずれにしても、Canterbury への巡礼

は三、四日の行程だとされているので、この日は4月中である。したがって馬に乗った軽装の男が Chaucer 一行に追いついたのは4月中だということになるが、この男の服装について「夏にふさわしい」という修飾をしている、すなわち Chaucer にとって April は summer のうちだということになる。言うまでもないが現在のイギリスでは April は春に入る。

Shakespeare の時代になると、spring, summer, autumn, winter という語がいずれも定着してきている。これらの語の Shakespeare の使用例も、おおざっぱに言うと、spring が 50 例ほど、summer と winter が 100 例前後ある。しかし、autumn の用例は 9 例しかない<sup>6)</sup>。なお、fall という語が「秋」の意味で使われはじめたのは 16 世紀からであり、したがって、Chaucer の用例があるはずはないし、Shakespeare もまだ「秋」の意味では使っていない。Shakespeare の秋への言及の少なさは彼がまだ autumn を一つの別個の季節として十分認識していなかったことを示すと考える。また spring の使用例が summer と winter の半分ということから、spring が独立した一つの季節としてかなり意識されるようになってはいるものの、どうやら、まだ季節として summer と winter と同等の位置を占めるにいたっていないらしいということが窺われる。これらを総合すると Shakespeare の意識のなかでは 1 年はまだ 4 つの季節ではなく、まず大きく summer と winter の 2 つに分かれ、あくまでこの大区分ののちに、summer の初めのほうが spring という季節として分離してきていたのではないか、そして summer の最後のほうは、まだ分離度が弱く、autumn と呼ぶこともあるといった程度の認識ではなかったかと推測される。

日本では 1 年を 4 つの季節に区分してそれぞれを「はる」「なつ」「あき」「ふゆ」と呼ぶということがすでに『万葉集』の時代から行われていた。したがって『御伽草子』の頃は今と同様これに従っていた。

Chaucer が 1 年を二季に区分する季節観であるということは 1 年を四季に分ける季節観の『御伽草子』との、そして古代から現代にいたる日本人の季節観との根本的かつ重要な相違点である。こういう季節観の違いはイギリスと日本の緯度の違いからくる気候の違いが反映したものであると考えられる。高緯度ほど日照時間の長さにかかわらず夏の気温が上がらず、期間も短くなるから春と秋が必然的に短くなる。したがって春と秋が独立した季節として分離しにくく、1 年を

寒い季節と温かい季節に区分する考え方になるものと思われる。このことから考えると、Chaucer の summer と winter は日本語の「夏」と「冬」という語と意味内容(内包)が違うということになる。しかし便宜上 Chaucer の summer と winter をそれぞれ「夏」と「冬」として扱っていくことにする。

### 3. 季節の表現と季節観

Chaucer が *The Canterbury Tales* の中で季節について言い及んでいる箇所を直接的表現を中心にできるだけ網羅的に抜き出して、表現の仕方と季節に対する考え方、すなわち季節観を整理、検討する。

すでにみたように、*The Canterbury Tales* を書いたとき Chaucer の意識の中では 1 年は 4 つではなく、summer と winter の 2 つの季節に区分されていたと考えられる。したがって *The Canterbury Tales* に用例の見出される月名、March, April, May, June (or July) と December はそれぞれ summer か winter のどちらかとして意識されていたことになる。(その証拠の 1 つは既述の通り) 以下の引用文で明らかのように March, April, May, June (or July) は summer に、December は winter に属す。以下大きく夏季と冬季に分けて季節の表現を列記する。

夏季に関する表現

summer という語を含むもの

既出の引用文 <9>

- [10] The hoote somer hadde maad his hewe al  
broun; (A. Prol. 394)
- [11] For ther is a versifiour seith that 'the ydel  
man excuseth hym in wynter by cause of  
the grete coold, and in somer by enchesoun  
of the greete heete.' (B. Mel. 2780-2785)
- [12] Bright was the sonne as in that someres  
day, (B. ML. 554)
- [13] In halle sit this Januarie and May,  
As fressh as is the brighte someres day.  
(E. Mch. 1895-1896)
- [14] Of which (=feeste) if I shal tellen al  
th'array,  
Thanne wolde it occupie a someres day,  
(F. Sq. 63-64)

- [15] The somer passeth, and the nyghtes  
longe  
Encressen double wise the peynes stronge  
Bothe of the lovere and the prisoner.  
(A. Kn. 1337-1339)
- [16] Wherfore, ageyn this lusty someres tyde,  
(F. Sq. 142)
- [17] And whan he wolde paye his wyf hir dette  
In somer seson, thider wolde he go,  
And May his wyf, and no wight but they  
two ;  
And thynges whiche that were nat doon  
abedde,  
He in the gardyn parfourned hem and  
spedde.  
And in this wyse, many a murye day,  
Lyved this Januarie and fresshe May.  
(E. Mch. 2048-2054)
- [18] Another Romayn tolde he me by name,  
That, for his wyf was at a someres game  
(D. WB. 647-648)

March という語を含むもの

- [19] Whan that Aprill with his shoures  
soote  
The droghte of March hath perced to the  
roote,  
And bathed every veyne in swich licour  
Of which vertu engendred is the flour ;  
Whan Zephirus eek with his sweete breeth  
Inspired hath in every holt and heete  
The tendre croppes, and the yonge sonne  
Hath in the Ram his half cours yronne,  
And smale foweles maken melodye,  
That slepen al the nyght with open ye  
(So priketh hem nature in hir corages),  
Thanne longen folk to goon on pilgrimages,  
And palmeres for to seken straunge  
strondes,  
To ferne halwes, kowthe in sondry londes ;  
(A. Prol. 1-14)

- [20] Whan that the month in which the  
world bigan,  
That highte March, whan God first maked  
man,  
Was compleet, and passed were also,  
Syn March [was gon], thritty dayes and  
two,  
Bifel that Chauntecleer in al his pryde,  
His sevene wyves walkynge by his syde,  
Caste up his eyen to the brighte sonne,  
That in the signe of Taurus hadde yronne  
Twenty degrees and oon, and somwhat  
moore,  
And knew by kynde, and by noon oother  
loore,  
That it was pryme, and crew with blisful  
stevene.  
“The sonne”, he seyde, “is clomben up on  
hevene  
Fourty degrees and oon, and moore ywis.  
Madame Pertelote, my worldes blis,  
Herkneth these blisful briddes how they  
syngre,  
And se the fresshe floures how they  
sprynge ;  
Ful is myn herte of revel and solas !”  
(B. NP. 4377-4393)
- [21] And so bifel that ones in a Lente—  
So often tymes I to my gossyb wente,  
For evere yet I loved to be gay,  
And for to walke in March, Averill, and  
May,  
Fro hous to hous, to heere sondry talys—  
(D. WB. 543-547)
- [22] He leet the feeste of his nativitee  
Doon cryen thurghout Sarray his citee,  
The laste Idus of March, after the yeer.  
Phebus the sonne ful joly was and cleer,  
For he was neigh his exaltacioun  
In Martes face and in his mansioun  
In Aries, the colerik hote signe.  
Ful lusty was the weder and benigne,  
For which the foweles, agayn the sonne  
sheene,

What for the sesoun and the yonge grene,  
Ful loude songen hire affeccions.

Hem semed han geten hem protecciouns  
Agayn the swerd of wynter, keene and  
coold. (F. Sq. 45-57)

- [23] “How han ye fare sith that March bigan?  
I saugh yow noght this fourtenyght or  
moore.” (D. Sum. 1782-1783)

April という語を含むもの

既出の引用文 [8], [19], [21]

May という語を含むもの

既出の引用文 [8], [21]

- [24] He was as fressh as is the month of May.  
(A. Prol. 92)

- [25] This passeth yeer by yeer and day by  
day,  
Till it fil ones, in a morwe of May,  
That Emelye, that fairer was to sene  
Than is the lylie upon his stalke grene,  
And fressher than the May with floures  
newe—

For with the rose colour stroof hire hewe,  
I noot which was the fyner of hem two—  
Er it were day, as was hir wone to do,  
She was arisen and al redy dight,  
For May wole have no slogardie anyght.  
The sesoun priketh every gentil herte,  
And maketh it out of his slep to sterte,  
And seith “Arys, and do thyn observaunce.”  
This maked Emelye have remembraunce  
To doon honour to May, and for to ryse.

.....

And in the gardyn, at the sonne upriste,  
She walketh up and down, and as hire liste  
She gadereth floures, party white and rede,  
To make a subtil gerland for hire hede;  
And as an aungel hevenyssshly she soong.  
(A. Kn. 1033-1047, 1051-1055)

- [26] It fel that in the seventhe yer, of May  
The thridde nyght. . . .  
(A. Kn. 1462-1463)

- [27] The bisy larke, messenger of day,  
Salueth in hir song the morwe gray,  
And firy Phebus riseth up so bright  
That al the orient laugheth of the light,  
And with his stremes dryeth in the greves  
The silver dropes hangynge on the leves.  
And Arcita, that in the court roial  
With Theseus is squier principal,  
Is risen and looketh on the myrie day.  
And for to doon his observaunce to May,  
Remembrynge on the poynt of his desir,  
He on a courser, startlynge as the fir,  
Is riden into the feeldes hym to pleye,  
Out of the court, were it a myle or tweye.  
And to the grove of which that I yow tolde  
By aventure his wey he gan to holde  
To maken hym a gerland of the greves,  
Were it of wodebynde or hawethorn leves,  
And loude he song ayeyn the sonne shene:  
“May, with alle thy floures and thy grene,  
Welcome be thou, faire, fresshe May,  
In hope that I som grene gete may.”  
(A. Kn. 1491-1512)

- [28] This mene I now by myghty Theseus,  
That for to hunten is so desirus,  
And namely at the grete hert in May,  
That in his bed ther daweth hym no day  
That he nys clad, and redy for to ryde  
With hunte and horn and houndes hym  
bisyde. (A. Kn. 1673-1678)

- [29] And eek the lusty seson of that May  
Made every wight to been in swich  
plesaunce  
That al that Monday justen they and  
daunce,  
And spenden it in Venus heigh servyse.  
(A. Kn. 2484-2487)

- [30] That highte Dianira, fressh as May;  
(B. Mk. 3310)

- [31] But thus muche of hire beautee telle I may,  
That she was lyk the brighte morwe of  
May,  
Fulfilde of alle beautee and plesaunce.  
(E. Mch. 1747-1749)

- [32] He moste han knowen love and his servyse  
And been a feestlych man as fressh as May,  
(F. Sq. 280-281)
- [33] So on a day, right in the morwe-tyde,  
Unto a gardyn that was ther bisyde,  
In which that they hadde maad hir  
ordinaunce  
Of vitaille and of oother purveiaunce,  
They goon and pleye hem al the longe day.  
And this was on the sixte morwe of May,  
Which May hadde peynted with his softe  
shoures  
This gardyn ful of leves and of floures ;  
(F. Fkl. 901-908)
- [34] Upon this daunce, amonges othere  
men,  
Daunced a squier biforn Dorigen,  
That fressher was and jolyer of array,  
As to my doom, than is the month of May.  
(F. Fkl. 925-928)
- [35] Ne nyghtyngale, in the sesoun of May,  
Was nevere noon that luste bet to synge ;  
(G. CY. 1343-1344)

June (or July) という語を含むもの

- [36] But now to purpos: er that dayes  
eighte  
Were passed [of] the month of [Juyn],  
bifil  
That Januarie hath caught so greet a wil,  
Thurgh eggynge of his wyf, hym for to pleye  
In his gardyn, and no wight but they tweye,  
(E. Mch. 2132-2136)

これらの引用文からわかることは全般的に *The Canterbury Tales* では Chaucer は夏を非常に肯定的な明るく、楽しいイメージでとらえていたということである。そして中でも May は夏の代名詞であり、最も美しく、最も楽しい月だった。他の月名よりも使用頻度が圧倒的に高いばかりでなく、summer という語そのものより2倍も多く使われているということがそのことをものがたっている。温かく、日の輝く、楽しい季節を表すのに summer という語よりむしろ May と

いう語のほうを選んでいるということは興味深いことである。

『御伽草子』にはこのような用語使用法はみられない。気候や風土からみて英国の May はだいたい日本の陰暦の春三月(弥生)に相当すると考えられるが、すでにみたように『御伽草子』では「春」の使用例は音訓合わせて48回、「三月」と「弥生」は合計5回である。季節を表すのに「春」より「三月」のほうが多く使われるということは、日本の他の古典作品(現代でもそうだろう)でも考えにくいことである。

もう一つ興味深いのが May が fresh, fair, bright なものとして比喩に使われていることである。([24], [25], [30], [31], [32], [34], [35]) 特に [31] の例においてはほかでもない May という名前の女性を、美しさ、楽しさ、輝きの点で May に譬えている。May という名には、つまり、そういう美質をそなえている(または、そなえていて欲しい)という意味が込められている。これほど May が好まれるのはこの語がもともと女神の名であるからかも知れない。日本にも「弥生」をはじめとして「五月」、「葉月」などという女性名がみられる。しかし、月名を比喩に使うというのは日本の古典文学にあまり見られない表現方法である。比喩に使うとするなら春夏秋冬であろう。こういう点から考えて、*The Canterbury Tales* における May は日本の「春」に近い語感をもつ語であると言ってよさそうである。「夏」よりはむしろ「春」に近い

日本語で「春」「夏」「秋」「冬」という語を使うのは情緒ないしは情趣を表現したいときであり、「一月」「二月」……「十二月」という語を使うのは事務的に年月日を示したいときであるという傾向が認められる。これに対し英語では March, April, May, June などのように月名でも日本語の「春」や「夏」という語のように情緒や情趣を醸しだすことができるものがある。これらの月名が数字でないことがこのような効果を生む大きな要因であろう。

夏の季節に関する表現をもう少し具体的にまとめておく。

Summer と言う語に関連して、自然現象の面で、暑さ ([9], [10], [11]), 太陽の輝き ([12], [13]), 昼の長さ ([14], (文脈から [15])) などへの言及がある。精神的な面では、新鮮さ、みずみずしさ、若さ、潑刺感 ([13], [16]), 楽しさ ([16], [17]) をそなえたものとしてみている。ここで言う楽しさというのは、外に出て友達のところを訪れたり、祭りに参加して歌ったり

踊ったりするということを含む。[17]はその延長線上である。

March, April, May, June (or July) と言う語については、これらに付けられた修飾表現や使われている文脈が似通っており、夏の季節の月としてほしい同じイメージでとらえている。そして May がその代表である。ただし [19] にみられるように、March はかわいた月であり、April は雨で潤う月である。しかしながら March も April と May と同様にプラスイメージでとらえられている。自然現象の面ではこれらの月は、温かい([22])、日の光が明るい([8], [22], [27], [31])、日が早く昇り日が長い([25], [27])、緑が鮮やかになり花が咲く([19], [20], [22], [25], [27], [33])、小鳥がさえずる([19], [20], [22], [27], [35])というような形容もしくは記述がされている。May にやわらかなにわか雨が降るということもみえている([33])。精神面では、新鮮さ、みずみずしさ、若さ、潑刺感([24], [25], [29], [30], [32], [33], [34])、楽しさや喜び([20], [22], [27], [28], [29], [31], [33], [34], [35], [36])、美しさ([27], [31], [32])をこれらの月に見いだしている。この時季は外で活動するのが盛んで、巡礼([19], [21])、狩り([28])、祭り([29])やそのほか屋外での遊びや行事が行われる。

夏の季節は良いことづくめで、いやなことがほとんどまったく書かれていない。日本と違って夏といっても普通ならそれほど暑くならず快適な英国の気候からみてこのことは驚くにあたらない。

冬季に関する表現

winter という語を含む表現

既出の引用文 [1], [2], [3], [4], [5], [6], [7] (これらは「年」という意味での用例)

既出の引用文 [11], [22]

[37] The wynter is goon with alle his reynes  
weete. (E. Mch. 2140)

December という語を含む表現

[38] The colde, frosty seson of Decembre.  
(F. Fkl. 1244)

年数を数えるのに使われている例を除くと、冬の季節についての表現はわずか4例しかない。夜の長い

([15] (文脈から)), 雨や霜の降る([37], [38]), 寒くて([11], [22], [38]), 厳しく、つらい([15] (文脈から), [22])季節である。夏にくらべてこの圧倒的な用例の少なさはいかに Chaucer が文学的に夏季のほうに強い興味を覚えていたか、いかに夏が好きであったかをものがたる。逆に Chaucer にとって、冬季のほうは、文学的表現意欲をかき立てるに値しない季節だったようである。

ここまでは直接的な季節表現の例であるが、季節は間接的に示すこともできる。Chaucer は当時の天文学に詳しくだったので、*The Canterbury Tales* には太陽がどの星座に位置するかによって間接的に季節を表す箇所が数箇所ある。

天文学上の星座による季節表現

既出の引用文 [19], [20], [22]

[39] Bright was the day, and blew the  
firmament ;  
Phebus hath of gold his stremes douyn ysent  
To gladen every flour with his warmnesse.  
He was that tyme in Geminis, as I gesse,  
But litel fro his declynacioun  
Of Cancer, Jovis exaltacion.

(E. Mch. 2219-2224)

[40] Phebus wax old, and hewed lyk laton,  
That in his hoothe declynacion  
Shoon as the burned gold with stremes  
bryghte ;  
But now in Capricorn adoun he lighte,  
Where as he shoon ful pale, I dar wel seyn.  
The bittre frostes, with the sleet and reyn,  
Destroyed hath the grene in evey yerd.

(F. Fkl. 1245-1251)

[19] と [22] の Ram と Aries は同じ星座で March から April にかけての期間を表す。[20] の Taurus は April から May, [39] の Geminis は May から June, [40] の Capricorn は冬至の頃を表す。これらは月の名のかわりに十二宮の星座を用いている点を除けば、季節観の面では特に直接的表現と変わったところはない。

動植物を記すことも間接的に季節を示すことになる。しかし、*The Canterbury Tales* において Chaucer



はそうすることにあまり熱心ではない。また、直接的表現といっしょに季節の動植物に言及することも多くない。動植物への言及が決して少ないというわけではないのだが、それらに季節感が乏しい。そのあまり多くない例から主な動植物をあげるとするなら、植物では5,6月のものとして、lily, rose, hawthorn, woodbine, pear, turfなどが登場している。動物では、nightingale, lark, turtle dove, hart, boarなどが、やはり5,6月の関連で、言及されている。これらの大部分はいままでにあげた引用文に見えている。

『御伽草子』に見られる季節表現と季節観は『古今集』や『源氏物語』の頃確立した日本の文学上の伝統的季節表現と季節観をほぼそのまま踏襲している。そういった意味で著しく典型的である。作者の顔の見えない説話集であるという性格上、ステレオタイプの季節表現ばかりになるのはやむをえない。また、説話というものが物語の背景の年代をぼかすのを常套手段としているということも、あたりさわりのない紋切り型を助長する。昔話の場合、季節は典型的でよいのである。

日本の文学上の伝統的季節表現と季節観はその原型が『古今集』の頃かたまつた。『源氏物語』も『古今集』と同質である。それ以来現在にいたるまで日本はずっとその影響下にある。『古今集』的表現方法と季節観がそれほど日本人の感覚になじみやすかったということであろうか、それとも最初の勅撰集としての権威であろうか。恐らく両方であろう。『万葉集』の頃にはまだ見られなかった「秋イコール飽き、そして物哀しさ」という図式は『古今集』の頃出来上がった。季節に関しては秋の夕暮れのようなしみじみとした情趣を第一とするという諒解が成り立ったのもこの頃からである。各季節と天候、動植物などの自然の風物との取り合わせの類型も数多く出来た。季節をからめた枕詞、掛け詞、縁語、本歌取りを和歌だけでなく散文にも使うといった表現技巧も確立した。『御伽草子』はこういった伝統を受け継いでいる。

その端的な例として次のような一節がある。浦島太郎が龍宮城に行ったところそこの「女房」が「この所に、四方に四季の草木を現せり。」と言って見せたのが、

[41] まず東の戸をあけて見れば、春の景色とおぼえて、梅や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、なびく霞の内よりも、鶯の音も軒近く、いづれの梢も花なれや。南面を見てあれば、夏の景色とうち見えて、春を隔つる垣ほには、卯

の花やまづ咲きぬらん、池の蓮は露かけて、汀涼しきさざなみに、水鳥あまた遊びけり。木々の梢も茂りつつ、空に鳴きぬる蟬の声、夕立過ぐる雲間より、声たて通る時鳥、鳴きて夏と知らせけり。西は秋とうち見えて、四方の梢も紅葉して、ませの内なる白菊や、霧たちこむる野辺の末、真萩が露を分け分けて、声ものすごき鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。さてまた北をながむれば、冬の景色とうち見えて、四方の梢も冬がれて、枯葉に置ける初霜や、山々やただ白妙の、雪に埋るる谷の戸に、心細くも炭竈の煙にしるき賤がわざ、冬と知らずる景色かな。（『浦島太郎』）<sup>7)</sup>

といった四季折々の景色である。ここに季節と自然の風物の組み合わせが極めて典型的な形で表されている。

この例はそれぞれの季節に感じる気持ちに触れていないが、気分をからめた季節表現の例も沢山ある。1例として次のようなくだりがある。鉢かづきがさる中將のところ働くことになったが、その中將の四番目の息子はまるで光源氏が在原業平のような美男子で、

[42] 春は花の下に日を暮らし、散りなんことを悲しみ、夏は涼しき泉の底、玉藻に心を入れ、秋は紅葉落葉の散りしく庭の紅葉をながめ、月の前にて夜を明し、冬は蘆間の薄氷、池の端に羽を閉ぢて、鴛鴦の浮寝もものさびし。重ぬる棲もあらばこそ、ひとりすさみて立ち給ふ。（『鉢かづき』）

といった風流人の暮らしぶりである。ここでは四季折々な見えるにつけても悲しみやさびしさを感じてもの思いにふけるといふ、日本文学に伝統として伝わる季節感覚が写されている。

季節表現を使った和歌的技巧も『御伽草子』の随所で駆使されている。「さいき」に以下のような箇所がある。豊前の佐伯という男が京になじみの女をつくった。が、佐伯はその後この女のことを忘れて、通わなくなつてから三年経った。女はこれを悲しみ、男のところの手紙を書く。その一節に、

[43] さてもさても、御下りのその後は、四方の萩原霜枯れて、便りの風の音もなし。下葉の露

も秋過ぎて、置き所なき葛の葉を、うらみんとすれどもかれがれの、葛ばかりぞ身に添ひて、しがらむ今のわが心、せめて思ひも慰むと、傾く月を見送れども、ながむる人のあらざれば、むなしき夜半の暁は、親しき閨に立ち帰り、明るも遅き恋衣、君が姿を夢にても、せめて見ばやと思へども、寝られぬ夜半のくせとして、夢さへ薄くなりけり。(「さいき」)

という部分がある。この一節はまだまだこの調子で続くのであるが、季節とその風物を含む序詞、掛け詞、縁語をつなぎ目として、鎖のように先へ先へとつながっていく、日本的尻取り型文の一つの典型である。この部分は、試みに装飾を取り去ってみると、たとえば、

さてもさても、御下りのその後は、かれて便りもなし。恨みんとすれどもかれがれの身に添いてしがらむ今のわが心……

とでもなろうか。いかに技巧的装飾が(前半部分に)多いかがわかる。このように気持ちを表すのに季節の風物を折り込んだ装飾的語句を用いるのが和文の表現方法である。こういった装飾部分には「春」「夏」「秋」「冬」という語がしばしば現れる。これはその時の実際の季節を表していることが多いが、そうでないときもある。こういった表現スタイルは *The Canterbury Tales* にはみられないスタイルである。

四季を表すことばを言わず、ただ動植物や天候だけに言及して間接的に季節をほのめかすということも日本文学ではよく見られる。こういうときの季節の指標となる語句は非常に多いが、日本人の読み手ならだいたい諒解している。春の指標としては、「花(桜)」「梅」「柳」「鶯」「霞」など、夏のものとしては、「時鳥」「夕立」など、秋のものとしては、「紅葉」「萩」「菊」「薄」「鹿」「虫の音」「松風」「露」「月」など、冬のものとしては、「鶴」「雪」「氷」などが代表的な語句で、『御伽草子』にもこれらはたびたび登場する。これらの語句が「春」「夏」「秋」「冬」という直接的季節表現といっしょに用いられることも多いことは言うまでもない。『御伽草子』とくらべると *The Canterbury Tales* では、季節の指標として動植物に言及することが圧倒的に少ない。

#### 4. 季節に対する好み

日本では『万葉集』以来春と秋とどちらがまさっているかを問題にしてきたが、イギリスにおいては、Chaucer の時代気軽にこの問いを発すること自体無理であった。そもそも春を表す語も秋を表す語も普通の語彙としては確立していなかった。これと平行して、春という概念も秋という概念も未発達だった。したがってこの問いを発するには夏の初めが好きか夏の終わりが好きかという形で聞くよりなかったであろう。*The Canterbury Tales* においては、事実上秋に相当する季節への直接的記述は皆無であり、間接的記述もほとんどみられないから、秋に対する関心が薄かったと考えられる。一方、spring という語は用いていないものの、春に相当する時季については沢山記述があるので、その時季に関心があったことは確かである。というより、March, April に関しての肯定的言い回しからみて、この季節が好きだったと言ったほうがよいだろう。しかし、Chaucer が一番好きだった季節は何かと言うなら、断然 May である。夏と言うより、春と言うより、May と言うのが適当だろう。Chaucer にとって 1 年は summer と winter の二季だったから、March と April は春で May は夏だという意識はなかったであろう。March, April, May, June, これらは皆いっしょくたに summer だった。そして summer と言えば May だった。*The Canterbury Tales* において Chaucer は沢山夏の讃歌を歌っているが、中でも、May が一番言及頻度が高く好意的な表現をしている。その賛美の仕方は日本人の感覚からすると、あからさまと思えるくらい鮮やかで直截である。

*The Canterbury Tales* の枠をなす巡礼の季節の設定が April になっているのはこの物語全体の雰囲気良く表している。The Knight's Tale も May の月に時季を設定した、明るく楽しい気分のみなぎった英雄恋愛物語であるし、The Merchant's Tale も主として May の月を(女主人公の名も May) 中心に話が展開する明るい気分の笑話である。

『御伽草子』では「春」と「秋」の使用頻度が高く、「春」と「秋」とでは「春」のほうが回数が多い、ということは前に見たとおりである。どちらも「夏」と「冬」にくらべると頻度ははるかに高い。『古今集』の頃から日本では、季節に関してはしみじみとした味わいを良しとする、というような風潮が確固たるものとなった。夏と冬は天候がきびし過ぎてしみじみを通り越してし

まう、それに冬は草花も動物も姿を隠してしまう、というようなことから春と秋に好みが集まる。このことを反映して『古今集』以降の歌集は「春」と「秋」の歌に「夏」と「冬」の2倍くらいの分量を割り当てるのが普通になっている。そして春と秋をくらべると、どちらも捨てがたいとしながらも、僅差で秋に軍配が上がることになる。『万葉集』の額田王の、

- [44] 冬籠もり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も  
来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山を  
茂み 入りても取らず 草深み 取りても見  
ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取  
りてそしのふ 青きをば 置きてそ歎く そ  
こし恨めし 秋山われは<sup>9)</sup>

という歌、また『拾遺集』の

- [45] よみ人しらず  
春はただ花のひとへに咲く許物のあはれは秋  
ぞまされる<sup>9)</sup>

という歌などそのことを端的に示す例と言える。さらに『源氏物語』には春秋くらべのモチーフが「薄雲」「少女」「胡蝶」の巻などに見られ、秋に傾いたり、春に傾いたりし、結局どちらも捨てがたいというふうになっているかのようだが、表立って春と秋をくらべていない地の文にかえてそれとなく好みが見れているようである。

- [46] 明けぬれば、夜深う出で給ふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木かげのいと白き庭に、薄く霧わたたりたる、そこはかたなく霞みあひて、秋の夜のあはれに多くたちまされり。(「須磨」)<sup>10)</sup>

とあるのは、ある春の明け方が「秋の夜のあはれ」より大分すぐれていると言っているわけだが、この言い回しの裏に、一般的には秋の夜のほうがまさっているという前提が読み取れる。『源氏物語』では「春」と言う語の用例が音訓合わせて111回、「夏」32回、「秋」143回、「冬」19回となっており、春より秋のほうが数の上でも優勢である<sup>11)</sup>。

『御伽草子』は「春」の使用回数のほうが多いので一見これからはずれるようであるが、秋に関連した動植物や天候などの間接的表現が沢山登場し、決して春に

負けていない。

イギリスで作家が秋に関心を持つようになるのはもっとずっと下ってからである。Shakespeareも秋にはあまり関心を示さず、Mayを特に好んでいるようである。

日本の昔話と言え、しみじみとした味わいが持ち味で、山の秋の夕暮れが心に浮かび、西洋の童話と言え、はなやかで明るく鮮やかなイメージがあり、森の春の昼間が思い出される。個々の物語を取ればこれに当てはまらないものもあるが、全体の感じがこんな風である。日本の古典文学が秋を好み、ChaucerやShakespeareがMayを好むのと呼応していておもしろい。

## 5. 結 び

Chaucerの時代はイギリスにおいてルネッサンスが始まった頃で、300年近くに渡ってノルマン王朝の言語であったフランス語とラテン語の支配を脱してようやく自分達のことば、英語で文学作品を書こうという気運が高まった時代である。Chaucerはその先頭に立っていた。Chaucerの書いた英語はこのような時機にあたって、後の英語の規範としての役割を担った。こうして一度表面から消えていた英語が再び表に姿を現し始めた。その意味でChaucerは英文学の伝統の源の位置を占める。このためChaucerは先人の英語の作品から影響を受ける立場ではなく(無論全然ないという意味ではない。また、ラテン系諸語の作家の影響を受けていたが)、もっぱら後の作家に影響を及ぼす側に立っていた。この点、成立年代が近いとはいえ、すでに『古今集』や『源氏物語』以来の確固たる文学的伝統の上に立つ『御伽草子』とは文学史上の位置を異にしている。

Chaucerが明るく楽しいMayにたびたび言及するのもルネッサンスの活気に満ちた空気の反映である。The Canterbury Talesには後の英国の作家、たとえば、Shakespeareなどへと受け継がれる表現が沢山含まれていた。本稿で見た季節の表現などもその例である。Chaucerが初めて使った比喩表現も非常に多い<sup>12)</sup>。一方『御伽草子』は伝統を受け継ぐ立場にある。季節表現に限って言えば、伝統をそのまま再現しているので極めて典型的で融通性に乏しい。(『万葉集』を好む人はこの歌集が後に生まれるステレオタイプを免れているからだろう。) ということの反映か The Canter-

*bury Tales* の季節表現は概して新鮮であっさりしていて、季節の推移に敏感なところは見られない。まだ季節描写が表現の一形式として確立していないと言えるだろう。Shakespeare でもまだ季節感が乏しいという印象を受ける。これに対して『御伽草子』は季節表現の頻度も高く、技巧的で濃密で、新鮮味は感じられない。季節の推移に敏感であることがスタイルとして確立している。そして『御伽草子』の季節表現は、自然をありのままに描写しようとの意図からではなく、レトリックとして季節または季節の風物に割り当てられている情緒を利用しようとの目的で使われている。敏感な様子を見せてはいるが、現実の自然現象としての季節に対しては鈍い面がある。

### 註

- 1) Tatlock, John S.P. and Arthur G. *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Romaunt of the Rose*.
- 2) 大島建彦校注・訳『御伽草子集』(日本古典文学全集 36) 小学館, 昭和 51 年。
- 3) Spring, summer, autumn, winter の語源・語史については *The Oxford English Dictionary*, 渡部昇一著『英語語源の素描』, 梅田 修著『英語の語源事典 英語の語彙の歴史と文化』を主として参照した。
- 4) 渡部昇一著『英語語源の素描』。古代ゲルマン語は 1 日を「夜」で表す慣例もあった。
- 5) Benson, Larry D. ed. *The Riverside Chaucer* third edition から引用した。以下 Chaucer からの引用はすべて同書からである。物語の略号は次の通りである。

A., B., C., ... は物語の Group 名。

ProL. .... General Prologue

Kn. .... The Knight's Tale

ML. .... The Man of Law's Introduction, Prologue, Tale, and Epilogue

Sh. .... The Shipman's Tale

Mel. .... The Tale of Melibee

Mk. .... The Monk's Prologue and Tale

NP. .... The Nun's Priest's Prologue, Tale, and Epilogue

WB. .... The Wife of Bath's Prologue and Tale

Fri. .... The Friar's Prologue and Tale  
Sum. .... The Summoner's Prologue and Tale

Mch. .... The Merchant's Prologue, Tale, and Epilogue

Sq. .... The Squire's Introduction and Tale

Fkl. .... The Franklin's Prologue and Tale

CY. .... The Canon's Yeoman's Prologue and Tale

行表示は Tatlock と Arthur の *Concordance* による。ただし *The Riverside Chaucer* には古い表示方法である *Concordance* 式の表示も併記してある。

- 6) Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* (third edition revised and enlarged by Gregor Sarrazin). New York: Dover Publication, 1971. と Spevack, Marvin. *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Georg Olms Verlag: Hildesheim, 1973. を参照。
- 7) 大島建彦校注・訳『御伽草子集』(日本古典文学全集 36) から引用。以下『御伽草子』からの引用はすべて同書から。
- 8) 中西 進校注『万葉集 全訳注原文付』(一)(講談社文庫) 講談社, 昭和 53 年から引用。
- 9) 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』(新日本古典文学体系 7) 岩波書店, 1995 年から引用。
- 10) 玉上琢弥訳注『源氏物語』(第三巻)(角川文庫) 角川書店, 昭和 49 年から引用。
- 11) 木之下正雄著『源氏物語用語索引』(上巻)(対校源氏物語新釈別巻 1) 国書刊行会, 昭和 52 年。
- 12) 金子利雄「G. Chaucer の直喩」(『日本大学人文科学研究所紀要』第三十八号, 1989 年)。

### 参 考 文 献

Benson, Larry D. ed. *The Riverside Chaucer* (third edition). Oxford et al.: Oxford University Press, 1990.

Tatlock, John S.P. and Arthur G. *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Romaunt of the Rose*. The Carnegie Institution of Washington, 1927. Reprinted, 1963, by Senjo Publishing Company, Ltd. Tokyo.

- Coghill, Nevill trans. *The Canterbury Tales*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd, 1972.
- Davis, Norman, Douglas Gray, Patricia Ingham, and Anne Wallace-Hardrill. *A Chaucer Glossary*. Oxford: Oxford University Press, 1989.
- The Oxford English Dictionary*. Oxford: The Clarendon Press, 1970.
- Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* (third edition revised and enlarged by Gregor Sarrazin). New York: Dover Publications, 1971.
- Spevack, Marvin. *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Georg Olms Verlag: Hildesheim, 1973.
- 榊井迪夫訳『完訳カンタベリー物語』(上・中・下)(岩波文庫)岩波書店, 1995年。
- 西脇順三郎訳『カンタベリー物語』(上・下)(ちくま文庫)筑摩書房, 1993年(上), 1991年(下)。
- 大島建彦校注・訳『御伽草子集』(日本古典文学全集36)小学館, 昭和51年。
- 市古貞次校注『御伽草子』(上・下)(岩波文庫)岩波書店, 1992年。
- 福永武彦, 円地文子, 永井龍男, 谷崎潤一郎訳『お伽草子』(ちくま文庫)筑摩書房, 1991年。
- 中西 進校注『万葉集 全訳注原文付』(一)(講談社文庫)講談社, 昭和53年。
- 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』(新日本古典文学体系7)岩波書店, 1995年。
- 玉上琢弥訳注『源氏物語』(第三卷)(角川文庫)角川書店, 昭和49年。
- 木之下正雄著『源氏物語用語索引』(上卷)(対校源氏物語新釈別巻1)国書刊行会, 昭和52年。
- 柳井 滋, 室伏信助, 大朝雄二, 鈴木日出男, 藤井貞和, 今西祐一郎校注『源氏物語』(二)(新日本古典文学体系20)岩波書店, 1994年。
- 渡部昇一著『英語語源の素描』大修館書店, 1989年。
- 梅田 修著『英語の語源事典 英語の語彙の歴史と文化』大修館書店, 1990年。
- P・ミルワード著『イギリス風物誌』(スタンダード英語講座11)大修館書店, 1985年。
- 成田成寿編集『英語歳時記 普及版』研究社出版, 1983年。
- 安東伸介, 小池 滋, 出口保夫, 船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』研究社, 1986年。
- 金子利雄「G. Chaucer の直喩」(『日本大学人文科学研究紀要』第三十八号, 1989年)。
- 池田広昭「Shakespeareの言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-16, 平成4年)。